令和４年度　Faculty Development「新任・昇任教員向け研修」 開催報告

福島医大新任・昇任教員向け FD を以下の通り行いました。

１．目的：・高等教育機関の教員としての意識を高める
・国家試験の動向や、医学教育の国内外の潮流を理解する
・本学における教育の特色（カリキュラム、教員の業務）を理解する
・事例検討を通して、教員間で意見交換を行う

２．日時と場所＊：令和４年４月 27 日（水）17:00～18:30　７号館大会議室
令和４年５月 13 日（金）17:00～18:30　７号館大会議室　＊同じ内容を２回実施

3. タイムスケジュール：　（敬称略）

開始時間	所要時間	形式	講師・進行	内容
16:45				受付開始
17:00	5		大谷 晃司	開会の挨拶、講師・ファシリテーター紹介
17:05	10	講演	及川　沙耶佳	「医学教育に押し寄せる標準化と国際化の波」
17:15	10	導入	川井　巧 安田　恵	事例提示
17:25	25	GW	＊参照	事例検討 「～試験は誰のためにあるのか？～」
17:55	15		川井　巧 安田　恵	全体共有
18:10	15	講演	亀岡　弥生	「福島医大の教員として知っておくべきこと」
18:25	5		及川　沙耶佳	全体 Q＆A
18:30				終了

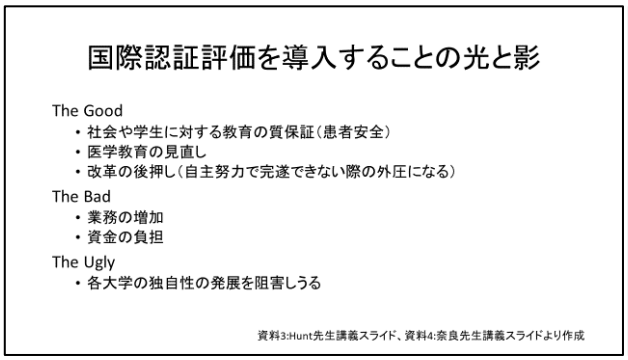
＊ファシリテーター　（敬称略）

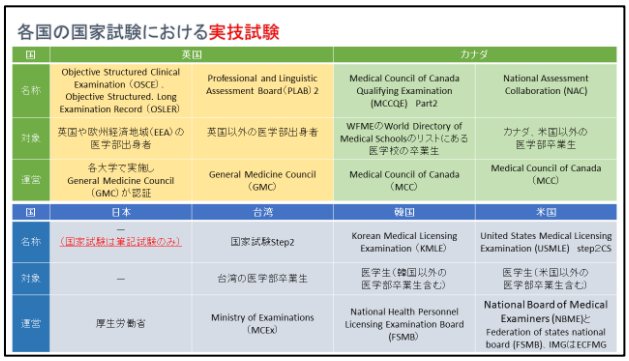
大谷　晃司　（医療人育成・支援センター）
亀岡　弥生　（医療人育成・支援センター）
川井　巧　（医療人育成・支援センター）
安田　恵　（医療人育成・支援センター）
諸井　陽子　（医療人育成・支援センター）
青木　俊太郎（医療人育成・支援センター）
赤間　考洋　（医療人育成・支援センター）
田辺　真　（総合科学教育研究センター）
三宅　将生　（細胞統合生理学講座）
小林　大輔　（細胞統合生理学講座）
及川　沙耶佳（医療人育成・支援センター）

4．当日の様子

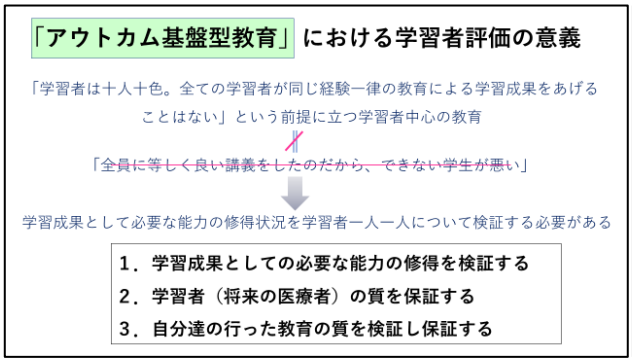
講演資料（一部抜粋）

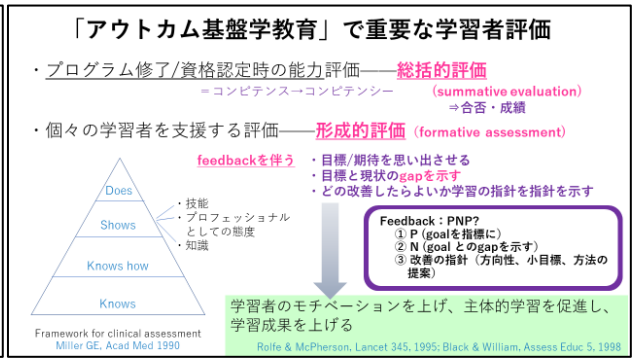
・「医学教育に押し寄せる標準化と国際化の波」





・「福島医大の教員として知っておくべきこと」





事例検討では、大学で行われる試験に対して意見の相違がある３名の学生と、教員が飲み会をしているという設定の動画を供覧しました。学生 M は大学の試験では国家試験と同じような問題を出すべきという考え、学生 O は国家試験と同じような問題ばかりではなく、各講座の特色ある内容を出すべきという考え、学生 A は試験内容によらず、通ることが大事であり、国家試験に落ちたとしてもそれは個人の責任であるという考えを持っています。教員 K 先生は、ひとしきり彼らの意見を聞いて、試験のあり方について一筋縄ではいかないと感じている、という内容です。

グループワークでは「試験は誰のためにあるのか」という問いを討議してもらい、その後、「大学の教養以外の試験がすべて国家試験の過去問になる」、という架空の想定を提示し、そうなったら自分たちはどういう意見を持つか、話し合ってもらいました。

５．グループワーク提出内容より

一つ目の問い「試験は誰のためにあると思いますか？」（記載内容の一部抜粋）

- 学生のため、国民のため、大学のため
- 生涯学習の機会を作る目的
- 組織のため（よりよい組織作りにつながる）
- 教員が学生の理解を確認するため

二つ目の問い「次年度から学部生の試験（教養を除く）はすべて国家試験の過去問から出題するという方針についてどう思いますか？」（注：これは架空の方針です）

- 全 18 グループ中、賛成　4、　反対　13、　無回答　1

【賛成の理由】

・医師増員が社会の要請であり、そのためには国家試験の合格は必須である。合格率を上げるために対策をすることは必要であり、過去問で対応することはその一つであるから

・資格をとらないと何も始まらない

・国家試験対策以外のスキルや教養は卒後教育でも身につけられそう

【反対の理由】

・過去問ばかりを解いている人が良い医師になるとは限らない

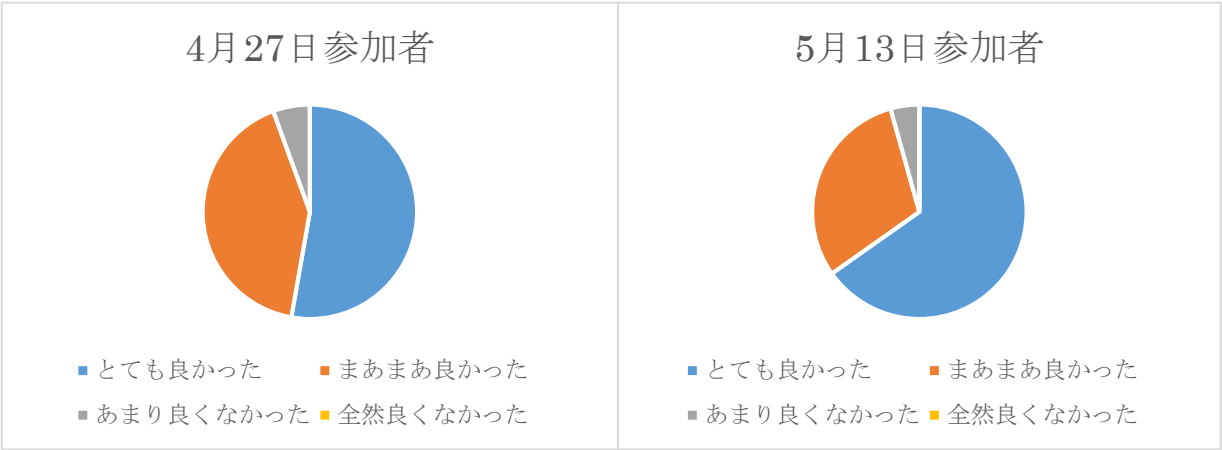
・最低ラインは上がるが、成績上位の学生は伸びて行かない

・短絡的な成果主義になるリスクを秘めているのでは？

・過去問を出すだけで国家試験の合格率が上がるのかは疑問

6.　参加者アンケートより

両日併せて 64 名の方にご参加いただき、59 名の方から事後アンケートの提出がありました。（回収率 92.2%）。



参加者からのコメントの一部を抜粋します。

- 普段コミュニケーションをとる機会がない先生方とグループワークができてよかった
- 教員として BSL で学生と対応する際の心がけを身につけられた
- 教育に関する話題を聞く機会は殆どなかったので大変勉強になった
- 大学での教育の意義を改めて考える良い機会でした
- ディスカッションや発表が有意義だった
- ディスカッションの時間がやや短かった

アンケートでは、他科の教員と意見を交換できたことが貴重であったという意見が多数認められました。診療科や専門分野を超えた教員の交流の機会はあまり多くありませんが、このような FD が教員の皆さんの交流の場になれば、と思います。さらなる改善点も踏まえ、医療人育成支援センターでは今後も様々な FD を企画していきたいと思います。

文責　医療人育成・支援センター　及川